

# SHIN CLUB 150

(株)辰 東京都渋谷区渋谷3-8-10 JS渋谷ビル5F

tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450



「POOL/POOL-SIDE」 撮影：鈴木研一

## 今月のトーク/monthly talk

### 仕事

写真は、コピーライター小西利行さんのオフィスです。2010年10月に弊社で改修工事を行いました。施工直後は、Shin Clubでご紹介できませんでしたが、建築雑誌などに掲載されたので、記事をご覧になった読者の方もいらっしゃることでしょう。この6月、追加の改修工事を承り、今回紙面でご紹介させていただくことになりました。あわせて、小西さんご本人にもFront Lineにご登壇いただいています。

広々としたスペースに平板ブロックを敷詰めた、ラフなインテリアが、リラックスした雰囲気を作っています。働く人の自由な発想を生み、緊張感をといて、スタッフ間のコミュニケーションをスムーズにします。小西さんによると、コピーライターという職業柄、「文章を書く」という自分の世界で「集中」しなくてはならないスペースと、クリエイティブディレクターとして、企業全体のコミュニケーションディレクションやWEBサイトなどを構築するとき、複数のスタッフが話し合いながら制作物を作っていく「交流」の場所が不可欠だということです。大きなテーブルを中央において、クライアントとそれぞれの専門分野のエキスパートが集まり、プレゼンテーションを行なう居心地のいい空間が必要なのです。

さて「仕事」とは、何でしょうか。多くの若者が就職できず困っていると聞きますが、単純に言えば「仕事」はそれ相応の働きをして「お足を頂く、収入を得ること」です。さらに「何を一生の仕事にするか」と問われれば、青臭いようですが「社会の役に立つ仕事」と考える人も少なくないでしょう。全ての仕事は、回りまわって、社会の役に立っているとはいえますが、そ

れでも自分の仕事を社会と結びつけて、大きな視点で日々の労働に取り組んでいるかどうかと問われれば、むずかしいところです。

東日本大震災の後、私たちはそれ以前とは明らかに違う価値観を持つことになりました。すなわち、「豊かさ、便利さだけが本当の幸せではない」という大命題です。それは「広告の世界にも大きく影響している」と小西さんは言います。未曾有の災害の後、人々は「復興」ということを真剣に考える必要に迫られています。そのとき何を共通目的にするかが、大前提になります。一人では到底出来ないことに全体で取り組んでいかなくてはならないからです。そしてそんな大きな機会が、過去に一度ありました。それが、第二次世界大戦による国土の荒廃でした。

この8月末、弊社の前身であった「辰建設」の創業者、松村慶文氏がなくなりました(享年84歳)終戦当時、16歳だった慶文氏は、焼け跡で「この国を復興させるのはこの俺だ」という思いを強く持ち、その後建設業にまい進し、倒産という事態を経てもなお、自分の仕事について常に考えている人でした。「余生を送る」という気持ちはさらさらなく、町を歩き、建物に入っては、思いついたことを人に語り、何とか自分の力で周りの人の暮らしをよくしたいという気持ちを持ち続けていました。東京の街を車で走れば、そのたびに、「あの建物のオーナーはこんな人だ」「この建物は〇〇さんの設計だ」と話はずきません。戦後の建設現場の歩みを語らせれば、何時間でも話をしているという具合でした。

自分の仕事を見つけることができた、幸せな人生でした。

POOL / POOL-SIDE

プールに見立てて改装した、クリエイターのオフィス

南青山の閑静な住宅街に佇む築 20 年のマンション。2 階のワンフロアをコピーライターの小西利行さんの新しいオフィスへ改修することになった。それまで渋谷にあったオフィスは、クールでスタイリッシュな吹き抜けのある白い空間だったが、以前手がけたマンション・リフォーム「Sakura flat」をご覧になった小西さんが、無垢の木を使ったラフな空間を気に入ってくださり計画がスタートした。

既存建物は、豊かな植栽と重厚な外壁タイルが特徴的な良質な建物である。オーナーはオランダ人の建築家で、そのタイルも輸入物というこだわりようである。東西南北に開かれた開口部は大きさも異なり、周辺環境にあわせて窓際のスペースをボードでトリミングしていくと、240 m<sup>2</sup>のワンフロアの真ん中にぽっかりと 70 m<sup>2</sup>のスペースが生まれた。少人数のスタッフにはとても広いスペースである。

小西さんの会社名「POOL」を思い浮かべ、見立てたのが「プール」と「プールサイド」というコンセプト。中央のスペースは水の張った「プール」、その外側のワークスペース、テーブル、本棚などは「プールサイド」と見立て、インテリアも水に関係のあるものをイメージしてデザインした。

例えば、中央の大きなミーティングのテーブルは、足場板で作ったイカダである。その周りに小西さん自身の所有するアンティークの椅子が水の中を浮遊しているイメージだ。床の材料には平板ブロックを採用。普通は外構に使う安価なコンクリート板だが、水つなかりで室内に用いてみた。厚みもあり、施工者は敷き詰めるのは大変だったと思うが、広々としたラフな空間にマッチした。壁は、床面より 700 ミリの高さで仕上げ材を変えている。スタッフのワークスペースは、窓際に床を 350mm 上げた小上がりをしつらえた。休憩したり、肌を焼いたり、何か飲んだり、とプールサイドでリラックスするようなスペースである。

都心の多くのオフィスは代わり映えのしない、無機質な空間であり、クリエイティブな作業をする人には、神経がもたないだろう。居心地のよいオフィスに、いろいろな人が集まることを願う。

(若松 均氏 談)



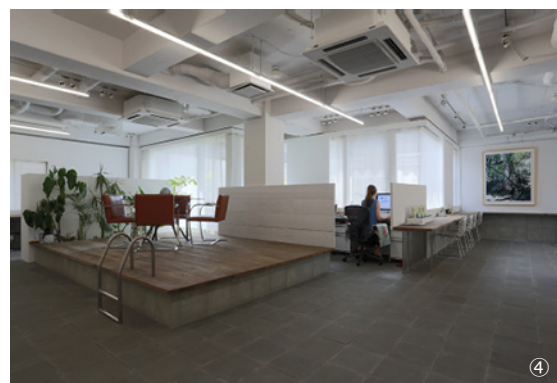
①



②



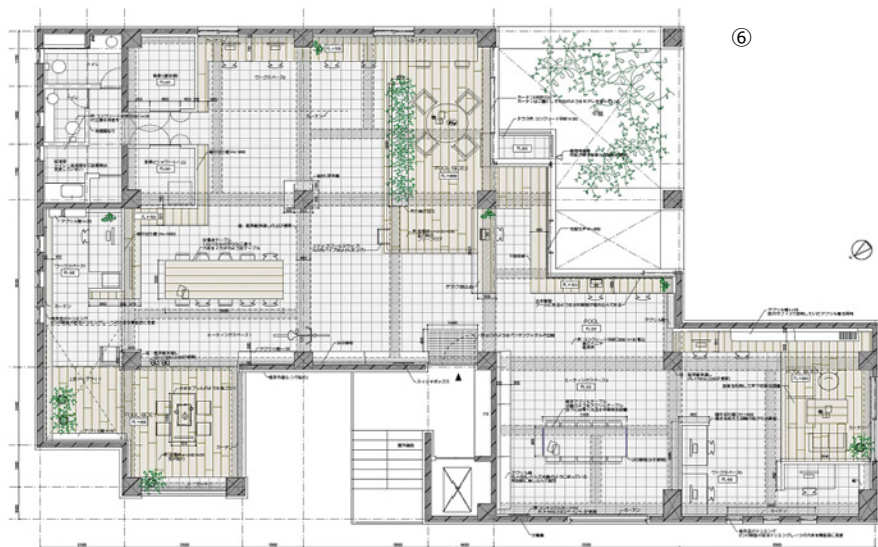
③



④



⑤



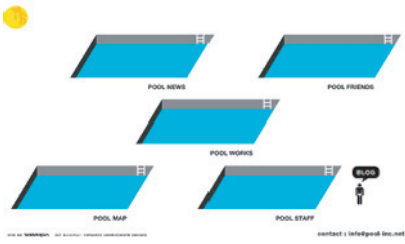
⑥

所在地：港区 構造：RC 造  
 規模：地上 3 階の 2 階ワンフロア  
 用途：事務所  
 改修設計：若松均建築設計事務所  
 竣工：1 期工事 2010 年 10 月  
 2 期工事：2012 年 6 月  
 施工担当：佐々木  
 撮影：1 期工事②鈴木研一  
 2 期工事①③-⑤アック東京  
 ⑥平面図

①建物外観。建物内側にも中庭があり、緑豊かな落ち着いた雰囲気のある建物である②中央外階段を上った 2 階入口より東側開口部を通して見える小上がりスペース。小西さんのワークスペースに隣接し、外壁のタイルが部屋の中から一番よく見える場所③中央玄関口からミーティングコーナーを臨む。既存建物の天井が低かったため、いったん天井の仕上げを全て剥し、エアコンも露出した配管もすべて白く再塗装した。配管の並びにあわせライン上に照明、ライティングダクト、スポット照明を配置している。照明計画はスカイツリーの照明計画を手がけた戸恒浩人氏。今回の 2 期工事では、照明を LED に変更。またトップのミーティングテーブルの手前にカーテンを設置。柔らかな仕切りで視線をさえぎる④南側のスタッフスペースを望む。手前のステンレスの手すりはプールサイドに欠かせないアイテム⑤以前のオフィスにあったアクリル製の椅子とテーブルがその足元に水中照明が配置され、夜は特に美しい。その奥は WEB・マーケットスタッフのワークスペース。開口部のトリミングは厚さ 125mm。既存のサッシを隠したり、3 つの縦長の窓を 1 つの大きな窓にデザインしたり、既存壁の間にアクリルや足場板の柵を差し込む事ができるようにする役目をしている⑥平面図。全体的に雁行する細長いスペースを、広々とした居心地のいい空間に仕上げているのがよくわかる

## 居心地のいいオフィス

小西 利行 / (株) POOL 代表取締役社長



「POOL」のHP。まさにプールそのもの、動きのある画面が楽しいサイト。ぜひ訪れてみてはいかが。  
<http://www.pool-inc.net/>



小西 利行氏 / オフィスにて

撮影：アック東京

## Toshiyuki Konishi

今月は、株式会社「POOL」の代表取締役、クリエイティブディレクターの小西利行さんにお話を伺いました。

大学卒業後、広告代理店博報堂に入社。コピーライターとして活躍後、2006年に独立。最近は商品だけでなく、施設のコンセプト開発からネーミング、店内、広告にいたるまで、企業のトータルディレクションの仕事も増えている。辰では、オフィス「POOL」の1期工事(2010年10月お引渡し)に続き、この6月にも照明や仕切りなど2期工事を施工。

一施工直後、平板タイルの床や空調や照明があらわしになったオフィスを見てどんな空間になるのかが楽しみでした。

小西：若松均さんが以前内装設計した知人のマンションを見せてもらったのですが、そのラフな感じが良かったんですね。事務所はどんどん変わっていくものと考えています。独立して最初に西麻布、2つ目は渋谷。今回で3つ目です。以前の事務所は白く透明感のある建物で、きれいで気に入っていましたが、もう少しぬくもりがほしくなりました。その設計者には断りを入れて、今回は若松さんに設計を依頼しました。もとアパレル事務所だった建物は開口部がほとんどつぶされていて真っ暗でしたが、外から見ると実は窓が多い。僕は開放感があるほうが好きだし、コピーライター、アートディレクターは集中して仕事をする必要もありますが、交流もできる「たまり場」が必要です。大きなテーブルをおいた広い空間が欲しかったんですね。

事務所を独立したとき、周囲には名前を考えてくれる人がたくさんいたのですが、僕はプールが大好きでね。これまで生きてきて一番居心地の良かった空間はどこだろうと考えてみると、プールだったんですね。それで「POOL」という社名にしたわけですが、今回、若松さんが新しいオフィスの話をしている時に、「せっかく『POOL』という名前の事務所なんだから、プールがいいじゃない」と言う。が、物理的に水を張ったプールにするわけもいかなないので、全体的にまわりにプールデッキがめぐらされていて、その下に水が張られているという印象にし、できるだけプールに無いようなものは置かないようにしようということになりました。

「プール」というと全体的に明るくて、泳いだり、寝そべっている人がいたり、何かを食べている人がいたり、場所は一つでも、集まる人がやっていることはそれぞれ異なります。肌を焼く人、本を読んでいる人…子供は子

供で楽しみ、大人は大人で楽しむ。でも基本は同じで、「気持ちいい場所」です。ですからこの事務所のコンセプトは、「いろんなタイプの人があるんなことを勝手にやっているけど、気持ちがいいプールみたいな場所」ということですね。

ークリエイティブディレクターの仕事について聞かせてください。

小西：基本的には、僕の仕事は「町医者」だと思っています。人は、大きな総合病院に行くときは、自分のどこが悪いかわかった上で内科や外科などの専門外来に受診に行くわけです。でも普段は自分の身体のどこが本当に悪いのかはわかっていないでしょ。企業の経営も同様で、経営者は何かうまくいかないとき、実際はどこをどうしたらいいのか、わからない場合が多いもの。なんかうまくいっていないことだけはわかる。それが基本にあります。一方、昔はどの町にも町医者が出て、「なんか調子悪い」と行くと、その人を診て、薬を出してくれたり、もっと大きい病院にすぐ行け、と診断してくれました。僕はクライアントと会うという話をするんです。「何かうまくいかない」と聞くと、ずっと話していくうちに、「ここはいい」「じゃ、ここはこうしたほうがいいんじゃないか」と悪いところについてのお互いの共通認識が生まれてくる。そこで、「こういうことをしたらどうか」と提案をすると、「なるほど」とクライアントも納得する。さらに「WEBのほうは、こういう風にしてみたら」という話をする。クリエイティブディレクターとしてコンサルティングもやるけれども、コピーライターとしても最終的な製作物を作ることもできるので、最終的に「手術」と言われたら、小さい「町医者」はできないけれど、手術まではできる「中規模の診療所」くらいということですね。

ー建築施工会社の広告について、何かご意見いただけますか。

小西：実際施工する人、現場を仕切っている人にもっと光があたるといいなと思いますね。ある意味僕らの業界と似ている部分があります。トータルディレクションが決まったら、あのカメラマンがいるとか、あのアートディレクターがいいからと、その人のいる制作プロダクションに頼むんですが、建築の世界は設計する側に寄りすぎていて、実際に作る側の裏方の情報が少ない。もっと実際に施工する人が立ってくると面白いでしょうね。ー本日はどうもありがとうございました。

## 「いろんな人がいろんなことをやっているプールが好きですね」

小西 利行 (こにし としゆき)

1968年 京都府生まれ

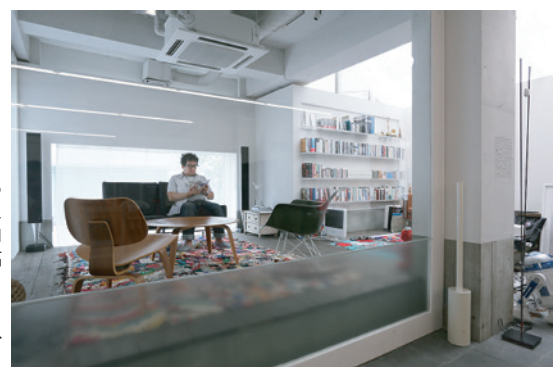
1993年 株式会社博報堂入社。コピーライターとして制作局に配属

2006年 同社退社後、株式会社 POOL 設立。現在に至る

テレビCM、グラフィックなど広告表現のクリエイティブディレクション、コピーライティングを中心にマーケティング、商品開発、コミュニケーション全般の開発を行っている。

主な広告作品：日産セレナ「モノより思い出」、サントリー「伊右衛門」、「ザ・プレミアム・モルツ」、レクサス「LS600hL」、など。内外の広告賞を多数受賞。

オフィスの一番奥にある小西氏のワークスペースと並ぶ談笑スペースで。フロアレベルより350mm高くした「プールサイド」は、冬はコタツになる。今回、手前の柱と柱の間にガラスの仕切りを設けた。



## 「松村慶文氏（元辰建設会長）逝去に寄せて」

(株)辰 代表取締役社長 森村 和男

8月26日、日曜日の夕刻、当社の創業者である松村慶文氏（会長と呼ばせていただきます）の訃報に接しました。

昨年秋の第1回ZENグループ運動会には、奥様とご一緒にお元気な姿で参加されました。その後発病され、闘病生活を送られておりましたが、一時回復に向かっていたのに残念です。

8月16日、ご息様から「父が森村さんに会いたがっている」と突然の連絡を受け、病院に駆けつけました。意識は混沌としておられるようでしたが、暖かい会長の手を握り「森村です。わかりますか？辰は大丈夫ですよ。必ず城南地区で雄になりますから！城南の雄は東京の雄、東京の雄は日本の雄ですから！」と耳元で決意表明を伝えたところ、その瞬間、昏睡状態にあった会長は目を見開き、手を握り返してくださったのです。「森村、本当だな！」と言わんばかりに…。

私は大きな宣誓をしたことで責任の重さを背負い込むことになりましたが、お蔭様で半信半疑に躊躇していた自分自身と決別することが出来ました。

ご本人のお話によれば、第105期特攻隊として予科練に入隊。死を覚悟していたのに終戦。荒廃した焼け跡に立ち「この国を復興させるのはこの俺だ」と気持ちを切り替え夜学に学んだとのこと。設計事務所を創業し建設会社に転進。自身で工事の道具を作り、生活の総てを建築に注ぎ、奥様共々壮絶なご苦労があったに違いありません。当時の新進気鋭な設計の先生方とも協働し、専門誌に取り上げられるなど、数多くの施工物件を残されました。その「イズム」を引き継いでいる当社の社員もまた、その作品の一つです。

私は36歳の夏に中途入社させていただきました。初めてお会いした時の、優しく人懐っこい少年のようなきらきらした目を忘れることが出来ません。

反面、震え上がるほど怒鳴られたことも多くありましたが、夜遅くまで仕事をしていると必ず話しかけて



くださり、暫くするとまた現れて「これを子供さんに・・・」と頂き物の煎餅などを置いていかれました。私は空腹に耐えられず、帰られた後で食べてしまうのですが、湿気っていて美味しくありません。しかし、温かくて嬉しくて涙しながら仕事をしていました。

会長は総ての人を快く受け入れていました。それ故に騙されたり、金銭的な打撃を受けたりしたことを私は知っています。

そのような折、その理由も話していただき、行動で示されていたことは私の中で金言となって残って、今の仕事に生かしております。私は勿論、当社にとっても、会長は父親のような存在でした。それ故に今まできちんとお礼を言っていないませんでした。

今、改めてお礼を言わせていただきます。

「松村会長、本当にお世話になりました。

ありがとうございました」

合掌

## 「御礼の言葉」

松村 美保子

去る8月29,30日、夫・松村慶文の葬儀におきましては、酷暑の中、大勢の皆様方に御会葬頂き、心より御礼申し上げます。故人もさぞや嬉しく感じていることと存じます。



予科練の制服を着た慶文氏（15歳）

昭和20年、第二次大戦の終戦を迎えた時16歳であった慶文は、最年少の海軍予科練生でした。焼け野原となった東京に戻ってきて、先輩勇士の命懸けの報国の後、「戦後の復興こそ自分の使命」と悟り、次々と焼け跡整理を引き受け、それが建築の仕事につながったのでした。昨年東北大地震の災害でも「何か手伝える事がないか」と、過ぎ去りし日を振り返って、同様の気持ちが沸き起こったようでございます。

昭和22年、私の兄と「辰建社」を設立。小さな部屋の真ん中に大きな電蓄をどんと据えて若者たちの仕事が始まりました。

昭和31年結婚。新婚旅行は伊豆でしたが、目を向けるのは建物ばかり。伊豆の山々の美しさは目にも入らず、話は建築のことばかりでした。

昭和33年、株式会社「辰建社」と改称。朝飯もそこそこに出かけ、夜遅くまで戻らないという生活です。夏休みは、車から海辺の宿に子らをおろして、自分は現場にとんぼ帰り。遊んでくれなくなった息子を義母は「親不孝者」となじりましたが、「社会で役に立つ男子に育て

上げたのはお母さんです。どうぞ誇りに思ってください」という私の言葉に、にっこり笑った義母の顔は今でも忘れられません。その義母が90歳で召されたときは、夫もずいぶん落ち込んだものですが、北海道から九州まで療養にお招きくださった方々のおかげで、元の通り復活することが出来ました。

張り切った行動の人生は、皆様のお力添えのお陰です。苦労もあったことですが、幸せでした。それが、思わぬことで倒産に至り、多大なご迷惑をおかけしたことが、本当に申し訳ございませんでした。

建築業は、建て主様はもとより、多くの協力会社の皆様があつてこそ、成り立つ事業です。主人共々、涙したことが何度あったことでしょうか。

しかし、その後13年、森村社長をはじめ、社員の皆様、協力会社の皆様の御尽力があり、新生「辰」の発展を目にすることができたのは、何よりでございます。建て主様、設計の先生方、ユニホー会長はじめグループ会社の皆様のお陰です。

昨年末より、体調を崩し、療養中は病院、自宅へと多くの方のお見舞い、お励ましを頂戴しました。最後の土曜日は、病院で家族全員が傍らに付き添うことができ、成長した孫らの呼びかけに加え、4月に誕生したばかりのひ孫の小さな手が頬に触ると、寝ていた目を開けて、「後を頼むよ」と言わんばかりにわずかに声を出しました。それからは静かに眠りにつき、意識もほとんど戻ることなく、翌日静かに息を引き取りました。

皆様のお力添え、深く深く感謝申し上げますとともに、長年の御交誼、心より御礼申し上げます。

## 「(仮称) NLPハウス新築工事」

地鎮祭 9月6日

世田谷の閑静な住宅街に建築します。随所にオーナーのこだわりが見受けられる住宅です。

構造：RC造 規模：地上2階 用途：専用住宅  
設計：井上洋介建築研究所  
完成：2013年3月完成予定

## 「住所移転の際はお知らせください」

事務所移転やお引越しの際は、ぜひご一報ください。

ご迷惑でなければ、引き続き「ShinClub」をお送りさせていただきます。また、担当者様の異動・退職の場合もお知らせください。

## 編集後記

・9月9日はZENグループ各社が一堂に会する、第2回ZEN社一丸大運動会でした。その模様は次号でお伝えします。

(株)辰通信 Vol.150 発行日 2012年9月11日 編集人：松村典子 発行人：森村和男

東京都渋谷区渋谷3-8-10 TEL:03-3486-1570 FAX:03-3486-1450 E-mail: daihyo@esna.co.jp URL: http://www.esna.co.jp